

領主制論の前提としての「領主」用語をめぐる

—— 莊園史料に現われる「領主」用語の実態と存在形態によせて ——

奥　野　義　雄

はじめに

古代・中世、とりわけ一〇世紀以降に莊園史料などに現われる「領主」云々という用語を基に展開されてきた所謂〈領主制〉論は、周知されている歴史理論である。

〈領主制〉論の展開にともなつて、「領主」（用語）を基礎にしながら、〈在地領主〉、〈地頭領主〉、そして〈莊園領主〉などの歴史理論下の用語が創り出されてきた。その途上で、史料に現われる「領主」用語の意味を問い返えず論究が提示されてきた。

しかし、「領主」用語に内在する領主の実態かつ存在形態が充分反映された〈領主制〉論といえるものか、否かという検討の余地は、「領主」用語にのこされているであろう。

言い換えると、史料にみえる「領主」用語は、単一的な「領主」を示すものか、あるいは複合的な「領主」を表わすものかによつて、〈領主制〉論の解釈をかえさせる要素をもっていると考えられる。

「領主」用語が歴史的産物であるゆえに、〈在地領主〉、〈地頭領主〉、そして〈莊園領主〉の歴史的概念が産まれてきたことは確かであるが、時期的変遷によつて現われてくるもののみ断言し得るものかは疑問視すべきかもしれない。

い。

むしろ、時期的変遷に加えて、変化していく要因が、「領主」用語に内在している結果として現われることも考えておくべきではなからうか。

このような視点で、先学諸氏の〈領主制〉論に留意しながら、あらためて荘園史料に現われる「領主」用語を検討し、〈領主制〉論―主に〈在地領主〉制、〈地頭領主〉制、〈荘園領主〉制―を考えていく糸口をつかみたいと考えている。

したがって、ここでは史料に現われる「領主」用語が語ろうとする実態かつ存在形態の提示に主標をおくことにしたい。

第一章 一〇世紀以降の「領主」用語に現われる徴納形態と〈領主〉の多様

中世〈領主制〉論が歴史理論であることは、すでに周知されている。この周知された歴史理論としての〈領主制〉論と、史料上に現われる「領主」との間には、少なからず一致しない「領主」の実態があり、先学諸氏によって指摘されて久しい^①。

とくに、黒田俊雄氏は、「領主の意味」において、「領主」の用語と意味を、①経済学的・歴史学的範疇の〈封建領主〉、②古文書・古記録上の〈用語〉、③学説的・歴史的範疇の〈領主制〉〈荘園領主〉〈私営田領主〉、という三つに区別され、歴史学者が設定する③は、②から抽象されて後に①の視角で処理されることがのぞましいと指摘されている^②。

たしかに、従来から封建領主制論を提示する前提として、古文書・古記録に現われる「領主」用語を基軸にしなから、領主制・荘園領主・私営田領主の語索が用いられてきた。

しかし、歴史理論としての「領主制」と、古文書・古記録―歴史的史実というべきか―に現われる「領主」制との間には少なからず隔りがみられるのではなからうか。

ここでは、古文書・古記録にみる「領主」と歴史理論上の「領主」について対比しながら、その相違性や不一致を提示することを目標とするものではない。むしろ、古文書・古記録に現われる「領主」用語が提示する「領主」の存在形態・実態を捉えることにある。

たしかに石母田正氏は、「領主制の基礎構造」において、「身分と階級を区別することをしないために」、かつ「身分ではなく階級としてとらえようとしながらも、地主・領主・名主・地頭その他さまざまな名称が伝統的な仕方^③で学者によってそれぞれのばあい^④に異った内容をもつて用いられているために」、歴史的概念として「領主制」の理論を提示されたのであるが、そこには若干検討すべき事柄があろう。

たとえば、古文書や古記録に現われるさまざまな「領主」―「開発領主」「本領主」「在京領主」「私領主」「出作領主」、「名領主」などの―用語の背景にある「領主の実態」、さらに「領主」をめぐるさまざまな関連―「領主」と「加地子^⑤」、「領主」と「下司」「郡司」、「領主」と「名^{みょう}」、「領主」と「地頭^⑥」、そして「領主」と「権門勢家」「社寺権門」など―にともなう「領主の実態」が、現段階で問いかえされるべきであらう。

さきの論考―「領主制の基礎構造」―で石母田氏は、

古文書や法制史料からの名称・概念をそのままの生の形で使用することは個々のばあいについては具体的であるが、しかしそれを学問に典型化し整理しなければ、一般性をもち得ないことをしらねばならない。

と行論され、さらに「一般化によって当然おこる若干の犠牲をおそれないことが必要である」と断言されている^⑦。

しかし、この「領主」用語から、いくつかの「領主制」の概念と名称が創り出されてきたことは事実であり、石母田氏の提示する「封建的ウクライド」を展開させていった「領主」制の原動力となった「領主」とは、在地領主

であるのか、地頭領主であるのか、それとも莊園領主であるのか、理論的かつ概念的課題として眼前に横たわっているといえよう（石母田氏の論究では〈在地領主〉を主とする）。

このような課題が存在するかぎり、あらためて古文書や古記録に現われる「領主」用語とその実像を捉えることが必要であろう。

したがって、このような意図からあらためて古文書や古記録に現われるさまざまな「領主」用語から、〈領主制〉をめぐる〈領主の実態〉把握の前提がいかなるものかをさぐっていくことにしたい。

そこで、一〇世紀以降に現われる「領主」用語の抽出とそこに表現されている「領主」の特色をみていくことにしよう。

まず、「領主」用語の初見について史料を繙きながら、その意図するところを窺うことにする。ただ、「領主」用語の初見は、すでに周知されているとともに、先学諸氏によつて提示されているとおりである。

すなわち、延喜四（九〇四）年十月十五日付の「唐招提寺使解案」にみる

件事、綱使御所牒送者、返牒如是、覽了全欲返請之、

謹上領主諸院

という文言がそれであり、黒田俊雄氏の論究によると、「領掌」や「所領」などの用語が成立してまもなく「領主」の用語が現われるようである⁸⁾。

そして、この唐招提寺の寺使解案に現われる「領主」とともに、康保三（九六六）年四月二日付の「伊賀国夏見郷刀祢等解案」に記載されている

右件杣四至并御牧四至、相分尤顯然也、（中略）、御牧是有領主、又牧内治田新開田并公田、本自任図帳公驗、牧可領之、以牧領掌、他人可領之、以其人領掌、（下略）

という記述に現われる「領主」用語についても提示されている。¹⁰⁾

延喜四（九〇四）年の唐招提寺使の「解案」と、康保三（九六六）年の伊賀国夏見郷刀祢らの「解案」にみえる「領主」用語に示された実態¹¹存在形態とへ領主¹²に課せられた地子あるいは加地子徴収などを、あらためてここで考えてみることにしたい。

まず、唐招提寺使の「解案」に「牒¹³備後国衙各々弁定、彼此可納地子之状、契文已了」という文言と併せて、「只今長谷参消息、不知大客事、亦不知大判官主者。收納事究了天、晦許可返坐¹⁴云々」という文言から、領主諸院に謹上した事象とは「收納」のことであり、牒宣によつて弁定する「地子」の收納であつたことが読みとれる。そして、そこには、国衙―地子―領主¹⁵諸院―收納という構図が成り立つのであり、地子收納において「領主」用語の表現がみられるといえよう。

次に伊賀国夏見郷刀祢らの「解案」をみると、さきの文言の後には、「件東南四至内、敢不可有他領、然而件名張河西、薦生御牧上方、添山所在寺神領田畠、私人領公田、其数已多、或号大屋戸、或号夏焼、然而其領主各別也」と述べ、続いて「併非東大寺領、以有其紕繆¹⁶」と記述されていることが窺える。¹⁷⁾

右衛門督殿所領である薦生牧と東大寺所領板蠅杣の四至にかかわる勘申による薦生村刀祢と夏見郷刀祢の解文に現われた「領主」は、牧内に存在していることが明示されるとともに、牧内には寺領、神領、私人領地、公田などが数多くあることも語られている。

これらの語られた事象から、薦生牧内―寺領・神領・私人領（＝私領）・公田―領主という繋りが考えられ、各「領主」の存在が窺える。

さらに、この解案の記載から、すでに周知されているように寺院―寺領、神社―神領、国衙―公田という構図が成り立つとともに、私人領地―（私領）―領主という関連が考えられる。そして、さきの「御牧是有領主」「本自任

図帳公驗、牧可領之、以牧領掌、他人可領之、以其人領掌」という文言からも充分想定し得る事象である。

また、そこには、「公驗」によるかぎり、「公田又官物祖稅毎色弁進」すべき収納義務が存在していたといえよう。したがって、一〇世紀に現われた「領主」用語には、地子収納義務（契文）遂行による領主の姿が反映している。では、一〇世紀以降に表現される「領主」用語には、いかなる意味づけ、つまり実態が内在していたのであろうか。

次に、一一世紀から一三世紀までに現われる「領主」用語に内在する意味を、莊園関連の史料から探っていくことにしよう。

寛弘元（一〇〇四）年九月廿五日付の「大政官符案」の「応寺家地與中納言平卿所領莊田四至内、慥令注進山地田畠事」の記載に、「吾等是此山領主丹生高祖子兩神也」とあるが、ここに明示された「領主」用語からは、明確な「領主」の意味を捉えることができない。

しかし、万壽二（一〇二五）年五月十四日付の「威儀師仁満解案」にみる、

件莊以先年御室於内供御座彼寺官長之間、御寺使入乱四至之内、号玉瀧御杣之領、勘徴地子之間日、故中満法師為其時領主、愁申御室、（下略）

という記載には、玉瀧杣と号して地子を勘徴した時期―其時―に故中満法師は「領主」となったことが窺える（傍点―奥野、以下同様にて略）。そして、この記載は、地子勘徴の時に中満法師が「領主」になったことを提示し、地子（徴収）―領主の関連を明確に表現している。

ここで表現されている「地子」は、永承三（一〇四八）年閏正月三日付の「伊賀国符案」にみえる元藤原実遠所領の開発にともなう免除地子のことであろう。すなわち、

右、彼房永承二年十月五日牒狀稱、件荒田畠等元者左馬允藤原実遠所領也、而以去長久四年三月十六日、限価値

房名永奉、売先了也、(中略)、早被立券、房名隨開發得、令弁濟所、当官物、但任傍例、依開發功、被免除地子并臨時雜役者、可立券言上之狀、所仰如件、郡、亘承知、(下略)

とあるのがそれであり、荒田畠⁽¹⁴⁾＝荒野の開發の功績によつて、傍例に任せて、地子(臨時雜役も)の免除がなされた。

この事象によつて、荒田畠開發をともしない通常の田畠には、地子が課せられていたことを示すものであり、荒田畠開發―地子免除と通常耕作田畠―地子徴収とが対置し得る。そして、この「地子」に「領主」が繋がっている存在であつたことになる。

同様な事象を示す史料として、康平三(一〇六〇)年四月廿一日付の「近江国愛智莊司等解」にみる次の記載を掲げることができるであらう。

一 領田作畠加地子等非例愁申事

右、謹檢旧例、作^(地方)□地子領田加地子、上古旧例當時傍例、其証非一、(中略)、或注畠地子、或免田以外別注土地地子、及永承元年麦畠地子徴符文合三枚、以先日令経、国覽已了、依之任前例可令徴之由、(中略)、件^(在云)×田云畠、俱是本寺所領也、然至于畠者、国家不令知之、至于田者、収公及全分、□国家不令知作畠、本寺不知作畠、以誰為領主、以誰為作人、以作人還為領主者、如何、彼輩不持公驗、煩^(マ)以元興寺為本家、并本図公驗注寺家所領哉、豈田舎土民、偷犯作官地、如私領不并地毛乎、若無地毛者、以何称領主、依之或寺領或私領、皆徴納領田作畠加地子等、当国当郡傍例也、(下略)

とあり、若干長文に亘つたが、作畠には地子、領田には加地子の徴収があつたことと、国家と寺院(元興寺)が作畠(の事実)を知らないのに誰が領主となり得るのかということを提示している。さらに、誰を作人となし、作人をして領主となすかということと、不耕地(不毛地)に「領主」は存在しないという意識が窺える。

この愛智荘の「莊司等解」から、田堵の非法の実態が明らかとなり、また領田・領畠には加地子・地子の徴収があつたことを知る。このことは、「依之或寺領或私領、皆徴納領田作畠加地子等、当国当郡傍例也」という文言から理解し得る。

さらに、この「莊司等解」から、耕地＝領田・領畠＝領主＝加地子・地子徴納という構図が考えられ、「領主」用語に内在する意識には、「加地子」 「地子」 徴収があつたといえよう。そして、「莊司等解」に初めて「加地子」が現われるが、この加地子と「領主」との繋りとはどのようなものであろうか。

言い換えると、「莊司等解」の末文に「徴五斗代地子并領田作畠加地子等□」という文言は、五斗代の地子と加地子の徴収が存在したことを示しているが、五斗代地子と加地子は、「領主」といかなる関連があるのであろうか。この「領主」と地子・加地子との関連は、四・五例の史料から詳しく窺うことができる。

I 史料―治暦二（一〇六六）年三月十一日付「元興寺大僧都房政所下文案」¹⁵、

右件田代荒野等、（中略）、元興寺大僧都御房并進地也、而為令開發、所丈部為延宛行也、者開、發三ヶ年間、地利免除、其後者、於官物者可并済国庫、於壹段別一斗御加地子者、可并進領家者也、於作手者、可為延之子孫相伝ニ領知也、

II 史料―応徳三（一〇八六）年三月 日付「東大寺政所下文」¹⁷

政所下 黒田莊下司源秀、友光併住人等可令早隨院藏人所堪并済加地子事

右、件人所領、年来之間依国司之妨罕、而今蒙、官裁并国司免判已畢、作人等何致遁避乎者、早隨領主之所堪、去年加地子并済之状、

III 史料―寛治二（一〇八八）年六月十九日付「東大寺領伊賀国名張郡定使懸光国解案」¹⁸

彼真遠為当国猛者、諸郡有彼真遠之所領、仍郡々令立田屋、所宛作佃也、国内人民皆為彼従者所服仕也、仍取

加地子、至于他在京領主者、皆所令徵取加地子也、隨當御領所故藥師寺別當御房御所知之時、被立券以降、於加地子者、每年所弁済来也、

IV 史料—元永二（一一一九）年八月三日付「東大寺政所下文案」¹⁹

政所下 黒田莊出作矢川・中村住人等 可令早隨私領主僧蓮覺所勘、弁済加地子事、

右件所、蓮覺相伝領也、隨住人等年来致其弁之上、前判等顯然也、敢不可有懈怠之状、下知如件、（下略）

V 史料—長寛二（一一六四）年十二月廿七日付「中原親貞解」²⁰

中原親貞解 申請 領家政所裁事

（中 略）

右、謹檢案内、件預所職相伝由来者、根本領主沙弥壽妙也、彼壽妙讓嫡男重方、次重方讓嫡男高方、（中略）、而高方之時、為被停止国衙之非法、（中略）、奉寄進大式殿裏政御領畢、仍於地頭預所職者、以本領主高方之子孫、永可為重代伝領之職之由、賜彼家下文、代々所相伝来也、（下略）、

I 史料からV史料までの記載の内、V史料を除いて、いずれも「領主」と加地子との関連を示す史料である。

I 史料の下文案からは、開発人の文部為延（開発領主と考えられている）が三ヶ年間の地利免除を得た後、官物の国庫弁済とともに、段別一斗の加地子を「領家」に弁済することが課せられている。

II 史料の下文は、官裁と国司免判を基に、「領主」（「院藏人」か）の所勘に従って、下司源秀・友光や住人らに加地子弁済が下されたことを示している。

III 史料の解案は、すべての「在京領主」が加地子を徴取するが、藤原真遠（実遠）は諸郡に所領を有し、郡々に佃を宛作するが、加地子の徴取はおこなわなかったという情況が窺える。この伊賀国の猛者真遠の在地での勢力を示す史料IIIは、石母田正氏以来の著名な史料の一つである。

この史料には、「在京領主」のすべてが加地子を徴収していることと、伊賀国の藤原真遠は加地子を徴収しなかったほどの在地勢力であったことが明示されている。そして、この在地勢力であった藤原真遠は、加地子徴収をおこなわなかった「領主」であったことになる（「領主」としての把握は周知のところである）。また、この所領が立券されて後に、加地子弁済があつたことも窺える。

IV史料の下文案は、「私領主」の所勘に従つて加地子の弁済を黒田荘出作の矢川・中村住人に東大寺政所が下したものである。

最後のV史料の解状は、I史料からIV史料までに示された「開発（領主）」「領家」「領主」「在京領主」「私領主」と加地子とのかかわりを明示するものとは異なり、相伝の預所職付帯の「根本領主」と「本領主」が同一のものであることを示す史料である。元来、領主である沙弥壽妙が「根本領主」と明示され、壽妙の子孫が相伝していることによつて「本領主」と明言されていたのである。

これらの史料から、「領主」用語に内在する実態を次のように理解し得る。

- (1) 「領主」には、元来の事態によつて、あるいは位置する情況によつて、〈開発〉、〈在京〉、〈根本〉、〈本〉、そして〈私〉の用字が冠せられる。それ故に「領主」の多様性が想定されるが、基本的には〈開発〉か、開発以外によつて所有（占有か）した事態による〈根本〉〈本〉を冠した「領主」が源初のものかもしれない。
- (2) 「領主」用語の多様性にみられるいくつかは、II史料やIII史料などでもわかる公的容認（官裁・免判・立券）を基盤にしたものであり、それ故に「開発（領主）」「在京領主」「根本領主」または「本領主」、「私領」の用語が明示されていた。

(1)と(2)の意味づけ、つまりこれらの存在形態が、「領主」に内在していたと考えられる。ただ、「開発（領主）」については、「開発領主」と明言されるのは、史料によるかぎり、一三世紀前半からである。その一・二例を

次に掲げることしよう。

まず、嘉禎元（一二三五）年十一月廿二日付の「海老名盛重讓状案」を挙げると、

讓渡播磨国矢野莊別名下司職事

右、下司職者、為開発領主相伝、当知行無相違之間、去文治二年六月日、預・関・東・御・下・知・畢、（中略）、但有限於本所御年貢者、無懈怠可致沙汰也、仍為後日讓状如件、

とあり、⁽²⁾「為開発領主相伝」という記載は下司職（付帶）とかかわる。下司職付帶・表示と「開発領主」との関連性は、今後の課題とすることとして、ここでは言及をひかえたい。

次に、弘安八（一二八五）年十月四日付の「遠江浜名神戸司大江助長申状」をみると、

右、子細者、助長依為開・発・領・主・之・正・流、忝預嚴蜜之、聖断之處、彼^(家内)違背^(違背)院宣、致乱入当神戸内大谷大崎、令殺害助長郎從馬允吉字□、^(庶)□代之悪行、何事過之哉、

とあり、出羽五郎家親の悪行に対する訴え申文に、大江助長自身が「為開発領主之正流」と言及している。

この二史料によるかぎり、何らかの情況下で「開発領主」の相伝あるいは正流という正統性を明確にする必然性があつた故に、「開発領主相伝」あるいは「開発領主之正流」と明示したと考えるべきであろう。

したがって、一三世紀以前に荒野・荒田畠を開発した在地勢力であつたことは確かであろう。ゆえに、下司職に補されたといえよう。

すなわち、少し時期が遡るが、下司職と「領主」との関連を示す史料を次に掲げて、例証としよう。

元暦元（一一八四）年四月 日付の「後日河院庁下文案」にみる平秀広らの但馬国温泉荘での濫行に対する停止と追却に関する院庁の下文（案）に、

爰季広依為地頭、雖補任下司職、於事不当、於莊損害、仍加其誠之處、季広申云、自業自得果之道理也、（中略）、

其狀稱、温泉御莊本領主・季平・季広・解申・進起・請事、右依爲地主・補下司・職畢、とあるのがそれで、温泉莊の「本領主」である季平・季広は地主たることを理由に下司職に補任されたことが述べられている。季平・季広の言及が正しいか、否かは別にしたとしても、「本領主」＝地頭＝地主＝下司職補任という構図は充分想定し得る。そして、このことは、同下文案の「又当時権門之武士」という文言からも考えられる事象であらう。

そこには、「本領主」であつたという基本要件が存在していたからにはかならない。ただ、この「本領主」用語の前提に〈開発人（領主）〉として存在していたか、否かは明確にしがたい。

この「本領主」とともに、さきの「私領主」、「在京領主」、「根本領主」以外に、応保二（一一六二）年五月廿一日付の「官宣旨案」にみる「近代以降彼村村私領主、号地子徵納官宣旨段別見米六斗（中略）、私領主等任傍段別一斗加地子之外、被停止六斗代非法之徵納畢」という記載の「村村私領主」が存在していた。²⁴

また、鎌倉時代になるが、文治二（一一八六）年六月六日付の「田口元幸寄進状」にみえる「進上私領田畠事」「在向野、辛嶋岡郷久永名」「領主官人代田口宿祢（花押）」という文言の「領主官人代」も存在していた。²⁵この官人代である領主田口宿祢の場合には、久永名に私領田畠を所領していたことが窺える。そして、この私領田畠とは、名田畠であつたと考えられ、〈名領主〉という概念で捉えられる存在であつたといえよう。

さらに、応保元（一一六一）年九月廿二日付の「東大寺進上文書目録」にみえる「出作領主馬允請文」という記載の「出作領主」も史料上に現われる。²⁶そして、後述していくが、一三世紀中頃以後には、「御家人領主」や「地頭領主」の用語がみられるようになる。

このように「領主」用語を用いたさまざまな領主が、一〇世紀以降現われてくるのであるが、あらためて古代・中世の「領主」用語にみられる領主の存在形態―さきの「本領主」とこれに関連する「領主」用語なども再度検討

することを前提に―とは、どのようなものであつたかを次に考えていくことにしたい。

注

(1) 石母田 正『中世的世界の形成』（主に第一章の「藤原実遠」、

石母田 正『古代末期政治史序説―古代末期の政治過程および政治形態―』（主に第二章の「封建的諸関係の成長」）所収、

小野武夫『日本荘園制史論』（主に「荘園制の確立」）所収、

黒田俊雄『荘園制の基本的性格と領主制』（『中世社会の基本構造』所収）

安田元久『地頭領主制』（『地頭及び地頭領主制の研究』所収）

これらの論考以外に関する論考は数多くあるが、ここでは割愛した。

(2) 黒田俊雄『荘園制の基本的性格と領主制―封建化の過程についての一考察―』（『中世社会の基本構造』所収）

(3) 石母田 正『古代末期政治史序説―古代末期の政治過程および政治形態―』

(4) すでに石母田氏は、加地子「領主」について行論されているが、この実態の論究へはいたっていない（註(1)、前掲書、

「領主」と加地子の論究は、西谷地晴美「中世成立期に

領主制論の前提としての「領主」用語をめぐる

おける『加地子』の性格』（『日本史研究』二七五所収、一九八五年七月刊）に詳しい。

(5) 安田元久『地頭及び地頭領主制の研究』

(6) 黒田俊雄『権門体制論』

(7) 石母田、前掲書（註(3)）

(8) 『平安遺文』第一巻、第一八九号文書（以下同様、平安遺文一―一八九と略す）。

(9) 黒田、前掲書（註(2)）

(10) 平安遺文一―二八九

(11) 平安遺文一―二八七

(12) 平安遺文二―四三六

(13) 平安遺文二―四九九

(14) 平安遺文三―六五三

(15) 平安遺文三―九五四

(16) 平安遺文三―一〇〇二

(17) 平安遺文四―一二四七

黒田荘下司源秀・友永・住人らへの下文から、領主―

加地子の関連が窺える（平安遺文四―一四九八、康和四年三日付の下文）。

(18) 平安遺文四―一二六一

(19) 平安遺文五―一九〇〇

(20) 平安遺文七―三三三二

(21) 『鎌倉遺文』第七卷、第四八五二文書（以下は、鎌倉遺文七―四八五二と略）。

(23) 平安遺文八一四一六六
(24) 平安遺文七―三三二一
(25) 鎌倉遺文一―一一一
(26) 平安遺文七―三二八一

(22) 鎌倉遺文二〇―一五七〇二

第二章 一〇世紀から一三世紀までに現われた「領主」用語とその実態

一〇世紀に現われた「領主」用語は、その後、さまざまな「領主」用語を生みだしてきたことを窺ってきた。

そして、「領主」用語において、その基本型とでもいえる「本領主」の用語は一世紀後半（八〇年代）から現われはじめ、一四世紀に至ることが、古代・中世の荘園史料からわかる。

ここでは、さきに触れた「根本領主」¹⁾「本領主」や「私領主」用語と実態を再度史料から窺っていくとともに、一三世紀までに現われる「名領主」と「出作領主」についても若干考えていくことにしたい。

そこで、再び、「領主」用語の初見史料である延喜四（九〇四）年十月十五日付の「康招提寺使解案」の「備後国衙各々弁定、彼此可納地子」「謹上領主諸院」の文言と、万寿二（一〇二五）年五月十四日付の「威儀師仁満解案」の「勘徴地子之間日、故中満法師為其時領主」という文言から、地子と領主とのかわり、併せて地子徴納と国衙との結びつきが理解し得ることを明示しておきたい。

さらに、すでに康平三（一〇六〇）年四月廿一日付の「近江国愛智荘司等解」で窺った記載の前半に田堵非法を明示し、「何況耕作寺領田、¹⁾弁地子者、田堵非法也」とあり、寺領田耕作に対して地子弁進が田堵に課せられていたのである。また、同荘司等解の末文には、

從今春以後、□堵等不可耕作領田畠一段一步、只徒可成空閑荒廢之地、田堵不可犯作寺領之莊地、(中略)、若又不可有制止事者、如田堵收納所□同令成髓御判、徴五斗代地子并領田作畠加地子等□、(下略)

とあり、田堵の莊地領作を拒否した情況下で、通常での領作に対する賦課として、五斗代の地子と加地子の徴納があつたことを明記している(傍点―奥野、以下同様にて略)。

同莊司等解において、五斗代の地子は「所当地子」であることがわかり、元興寺領莊園や大安寺領莊園なども大半は、所当地子五斗代であつたことも理解し得る。

そして、この莊司等解には、「領主」用語に現われる意味が示されている。すなわち、「若無地毛者、以何称領主」という文言がそれであり、地毛^二耕作領地^一がなければ「領主」といえないことは、前述のとおりである。

さらに、「依之或寺領或私領、皆徴納領田作畠加地子等、当国当郡傍例也」という記載によつて、寺領・私領ともに領田作畠の加地子などを徴納することが読みとれる。併せて、徴納する課役とは五斗代の地子と領田作畠加地子などであつたことが窺える。

したがつて、莊司等解の記載をみるかぎり、(田堵らに對して)五斗代の地子と、領田作畠の加地子の徴納が課せられていたことにならう。だが、「領田作畠加地子等、非例愁申事」の条文にみえる「謹檢旧例、作^四□地子領田加地子、上古旧例當時傍例、其證非一」という文言から、作畠地子と領田加地子の課役の存在が窺える。

言い換えると、五斗代の地子の対象所領が何かということと、領田作畠の加地子に對して作畠の地子と領田の加地子が同一のものかという点を、いかに理解すべきかであろう。

この問題点(作畠―地子と領田―加地子であるのか、領田―加地子と作畠加地子であるのかという不統一な文言による解釈)を解決することが、〈領主〉―〈地子〉のかかわりから〈領主〉―〈加地子〉への展開を導き出す前提とならう。^⑤

康平三（一〇六〇）年の「近江国愛智莊司等解」は、所領を所有することによって「領主」たり得ることを明示しているが、「領主」と地子あるいは加地子とのかかわりを充分証明してくれる史料とは言いきれないと考えられる。

このことはともかく、史料（主に『平安遺文』と『鎌倉遺文』）に「本領主」用語が現われるのは、応徳元（一〇八四）年二月十三日付の「伊勢国掃守某畠地売券写」にみえる「右件畠地、従本領主僧勢増之手、買得進退領掌□□処」という文言からであろう。

その後、④天永元（一一一〇）年閏七月十三日付の「沙弥心覚處分状案」、すでに触れた⑥長寛二（一一六四）年十二月廿七日付の「中原親貞解」（この解から「根本領主」と「領主」は同一であることが窺えるのである）、⑦治承二（一一七八）年八月日付の「藤崎宮々掌木行近田畠売券案」⑧元暦元（一一八四）年四月日付の「後白河院庁下文書」、⑨建久七（一一九六）年二月日付の「肥前河上宮講衆等解案」、そして⑩建仁三（一二〇三）年十月五日付の「僧長允田地売券」などがあり、一一六〇年以降に「本領主」用語が数多くみられるようになる。そして、一二〇〇年代以後にはさらに「本領主」用語が多くなり、枚挙に遑がないほどである（本領主を中心にまとめた付表を参照されたい）。

一方、「領主」用語については、すでに先学諸氏の指摘のとおり、九〇〇年代に現われて、一二〇〇年代以後も数多くみられる。

さきに掲げた①延喜四（九〇四）年十月十五日付の「唐招提寺使解案」をはじめ、②万寿二（一一二五）年五月十四日付の「威儀師仁満解案」、③寛治元（一一〇八七）年十二月十四日付の「東大寺政所下文」、④康和四（一一一〇二）年九月三日付の「東大寺政所下文」、⑤大治元（一一二六）年後十月廿日付の「内藤正資清書状」、⑥保延四（一一三八）年十一月十五日付の「薩摩国阿多郡司平忠景解案」、⑦元暦元（一一八四）年九月日付の「攝津国垂水西牧萱野郷百姓等解」、そして⑧建仁三（一二〇三）年十一月日付の「大和春日大社政所下文案」などには、「領

主」用語がみえるが、「本領主」と同様に、その件数は数多い。

では、「本領主」と「領主」との用語上の違いは、その意味する実態においても反映しているのであろうか。

そこで、次に③から④までの史料と①から⑧までの史料に関連する記載を二・三例加えて、「本領主」「領主」用語の意味と実態が同質か、異質かを検討していくことにしたい。

まず、天永元（一一一〇）年の③の史料には、「又箕曲・池田両所莊地者、先祖相伝所領也、代々支配之□□口代、荒所頗散在四至内也、件地兩人各等分可領知也」という文言がみえ、沙弥心覚の所領莊地は先祖相伝の所領であり、心覚の子息に處分し各自が等分に領知すべきとある。そして、心覚は「本領主入道當郷之人也」と記載された在地の「本領主」であつたことが窺える。

次に保延四（一一三八）年の⑥の史料の記載をみると、「右、件山野荒地、雖相伝私領、依為日羅上人建立寺仏地辺、（中略）、所奉施觀音寺如件」とあり、阿多郡の郡司平忠景は相伝私領を觀音寺に施入し、「領主郡司平忠景」と署名押判している。

④と⑥の史料から、一方は「本領主」用語を用いて先祖相伝莊地の處分をおこない、他方は「領主」用語で表現して相伝私領を寄進していることがわかる。そして、「本領主」の場合は「當郷之人」と表現し、「領主」の場合は「阿多郡司」を表示し、いずれも表わし方に違いをみせるが、在地の「領主」であつたことは確かである。

同様な事象は、举例した弘承二（一一七八）年の⑤の史料とともに、久寿二（一一五五）年二月廿七日付の「度会正房田地売券写」からも窺える。

すなわち、⑤の史料（田畠売券案）には、「右件田畠者、行近之先祖相伝之私領也、然者依有要用、限永年、見直二千足之于所沽渡実也」と記載され、「本領主散位木行近」と署名押判されている。

また、さきの久寿二（一一五五）年の史料（田地売券写）には、「右件田、元者正房先祖相伝私領也、（中略）、

限件直物、所於永沽渡進外宮玉串大内人吉貞如件」²⁴とあり、「領主外宮官符権祢宜度会神主」と署名し、自ら「領主」であることを明示している。

この二史料から「本領主」「領主」とも、先祖相伝の私領であることが窺え、「本領主」と「領主」用語を意識して使い分けているが、それぞれが異なる実態を現わすものではなかったとも考えられる。

言い換えると、「本領主」「領主」の用語の違いはあるが、その実態の相異を表現するものではなかったことになるとも考えられる。ただ、この二史料には、「在地領主」であるという表現を窺うことができない（「先祖相伝」云々のみでは在地の「領主」であると断言できない）。

だが、「本領主」「領主」用語にみる「領主」の実態とは、同一のものであるのか、否かが問題としてのこる。次にこの点を少し時期が下るが、弘安八（一二八五）年十一月十三日付の「後宇多天皇宣旨」（史料1）²⁵、弘安九（一二八六）年閏十二月九日付の「関東評定事書」（史料2）²⁶、そして正応元（一二八八）年九月日付の「某厨相伝系図」（史料3）²⁷から窺ってみることにしよう。

弘安八（一二八五）年の史料1には、「可停止以寺社領、寄附他社他寺、及人領事」の条項に「縦彼領主依別敬神帰仏、以其得分内、雖有割分、事更不可成他社他寺之号」とあり、敬神帰仏の「領主」の寄付について記述しているのに対して、「可子孫相伝由、本家若領家賜契狀於預所事」の条項には、「不調向背事者、可為本領主之進止」とみえ、預所にかかわる事柄について「本領主」の進止が明示され、この条項の「本領主」と「領主」は別々の実態を現わしていると理解し得る。

次に弘安九（一二八六）年の史料2には、「御厨并宇佐神領、被_レ相伝領主知行、被付社家畢、而宇佐領既被_レ返本領主之上者、御厨領主等不可有違_レ欵、仍如元被_レ返本主」と記述され、ここでも相伝「領主」と「本領主」は異なった存在であると考えられる。そして、「本領主」と「本主」の用語が使われているが、両者は同一の存在である

ことも窺える。

ただ、正応元（一二八八）年の史料3の相伝系図

には、「^{御厨}御厨^{領主方}」職相伝系図」「^{領主}領主・恵・真^{圖表}」とあり、さらに「御厨相伝系図如期、凡本領主・恵・真・阿闍梨

以仁安二年^{（奉力）}寄進太神宮」と記載されていることから、系図の「^{領主}領主・恵・真」は、「本領主・恵・真」であるとともに、

「^{御厨}御厨^{領主}」職相伝系図」という文言によつて「^{領主}職」を付帯していたことにならう。史料3で表現され

ている「本領主」の実態は、〈領主職〉付帯者となり、「領主」と〈領主職〉付帯者は同一の存在ではないのか、否かが問題視されてくる。

だが、「領主」用語と「本領主」用語は、その実態自体が異なり、本領主＝本主＝領主という構図が想定し得る。そして、この構図に〈領主職〉付帯が「本領主」に付け加えられるのであろう。なぜなら、さきの史料3と同様な実態を示す史料がある。すなわち、弘安七（一二八四）年の「源頼基申状」に、

^{（河内力）}国高木莊本領主源頼基謹申

^{（奉力）}日社領同国古市郡高木莊本領主職者、

相伝私領也、

とみえ、〈本領主職〉付帯が「本領主」に付加されている。

だが、弘安六（一二八三）年九月四日の条（『中臣祐春記』の「大和春日社政所下文」）には、「任・長者宣・国宣并本領主・記録等旨、雖替青女領主職、於年貢以下濟物者、先納置保庫」「次松嶋者、当寺僧実深治部卿公別相伝地也、」当保領主職之事、長者宣并国宣、実眼門跡相承之候、（中略）、而今非器青女領主條」とみえ、^{（奉力）}「本領主」などの旨に任せて〈領主職〉が「領主」に付帯されている。

この二史料をみるかぎり、「本領主」は「領主」とは異なる存在であり、〈本領主職〉と〈領主職〉とのかかわり

は明確ではないが、「本領主」が（本）領主職に付帯に關係していたと想定し得る。そして、さきに示したように「本領主」↓「領主」という上下關係が考えられるようである。

では、この「領主」用語の実態とはどのようなものであつたのであろうか。次に「領主」の実態について、二・三の史料から垣間見ることにしよう。

弘安八（二二八五）年九月晦日付の「豊後国大田文案」をみると、「豊後國中神社仏寺權門勢家莊園國領公田及領家・領所・地・弁済使等交名事」に続いて、「一豊後国莊公并領主等事」について記載され、「領主」用語に内在する実態が明記されている。すなわち、

一 田数并領主等事

一 国崎郡 千六百三拾八町内

武蔵郷 参百町

領主宇佐宮領、主神官名主等

本郷二百五十四町八段領主神官名主等

久吉名拾六町 大友兵庫入道殿

重藤名八町貳段 同前

地頭

池内 永吉名貳拾壹町

御家人忠左衛門尉惟景跡木工助三郎景元法師法名道念

安岐郷貳百町宇佐宮領

領主。

余名・參拾六町・神官・名主等

地頭

弁分八拾町 御家人・日田・弥三郎・永基・法師・法名・法基

とあり、史料をみるかぎり、「領主」は神官・名主などであつたとも理解し得る⁽³⁰⁾。だが、領主・神官・名主などとも読みとれることもできる。

いずれの解釈が確かであるのかは、この大田文案と関連する同年月日の「豊後国函田帳」によつて窺える。すなわち、「豊後国莊公并領主等之事」云々に続いて、

余名三拾六丁

領主・神官・名主等

弁府拾丁

地頭・日田・弥三郎・永基・法名・法基

(中略)

竹田津二拾丁

領主・竹田・津兵衛・允惟・永運・法名・法基

白野莊二拾五町

宇佐・弥勒寺・領主・家所司等、有名・主・数・人、

岐部浦拾五丁

領主・岐部・三郎・成末・法名・四妙

とあり、領主・神官・名主などが豊後国の莊園・公領に存在していたと理解できる。そして、竹田津や岐部浦の「領主」は在地の領主であつたことが窺えるとともに、彼らはいずれも法名をもつ僧侶（在家僧？）として存在していたことが理解し得る。さらに、白野莊においては、大田文案に「栢野式拾町 同弥勒寺家所司等」とあることから、寺家（領家）の所司らとともに名主数人がいたことにならう。

言い換えると、領主＝神官、領主＝名主という存在ではなく、「領主」は在地の有力層（土豪層？）であつたと考えられる。

だが、文永二（一二六五）年十二月一日付の「若狭国惣田数帳写」に「重国名十五町壹反（『国領』と明示）の条の末尾に、

『領主御家人青左衛門尉跡、同源次郎伝領也』

とあり、重国名は領主かつ御家人の青左衛門尉が所有し、その後源次が伝領したのである。

同様な記載は、「岡安名六町七反三百五十ト」が領主かつ御家人であつた岡安馬大夫の所領であることを明記している。すなわち、

『領主御家人岡安馬大夫跡也、而佐分郷地頭職御代官被押領之間、岡安孫二郎訴申最中也』

という文言がそれである。

この惣田数帳写には、重国名―領主―御家人、岡安名―領主―御家人という「領主」の実態の一つが提示されている。

さらに、文永二（一二六五）年九月日付の「宇佐保重申状案」にも、

件利行名事、領主妙直所進之訴状具也、而妙直父盛信為地頭代、被殺害之間、妙直祖父盛泰宿祢訴申 関東之時、
（中略）、地頭代朝弁以下名主与利行領主、盛泰、於杜家召問兩方、（下略）

とあり、利行名の領主妙直の父盛信殺害にかかわる訴申状（案文）であるが、この申状から利行名―領主―地頭代という存在が窺える。そして、利行名の領主も盛泰（祖父）↓盛信（父親）↓妙直へ伝領されていたと想定し得る。

このような「領主」と「名主」との存在形態は、ずっと時期が遡るが、すでに永暦元（一一六〇）年十二月六日付の「攝津国垂水牧寄人申文案」から窺うことができる。すなわち、

右、謹検案内、件時枝者、雖為一名、其領莊各別也、所謂西時枝・中時枝也、爰西時枝領主定季法師、（下略）

という文言がそれであり、時枝名の領主は西時枝と中時枝で異なると述べられている。

さらに、同時期である応保二（一一六二）年二月日付の「春日大社預下文案」には、「可令早行向山辺郡中。小太郎・領主・御許、触申子細弁済年々所當御供米事」という文言によつても中小太郎名の領主の存在が窺える。⁽³⁶⁾

このように所謂〈名領主〉は、名主層と異なる存在であるとともに〈名〉の内部に複数の「領主」がいたのである。複数の「領主」が存在していたのは、〈名〉のみではなく、〈荘〉にも複数の「領主」が存在していたのである。

莊園内に複数の「領主」が実在していたことを示す史料として、応保二（一一六二）年四月二日付の「大和国東大寺仏聖免田田堵解の中にある」「東羽鳥莊并安田莊領主四人二丁四段返抄タハス」云々という注進に

東羽鳥莊内二町返抄不賜之、但之内未進三段^{助則名}安田莊内四段之返抄不給

右件返抄等、雖尋乞、領家不賜之、相尋返抄事、全先例事也と申モ所不給也、件領主皆興福寺住僧也、仍不及力之状、注進如件、

とあり、東羽鳥莊と安田莊の四人の領主の返抄のことで僧俊成が注進した書状であるが、この注進状に領主四人と記述されている「領主」とは、すべてが興福寺住の僧侶であつた。

また、この注進状からは読みとれないが、同田堵解の中にある同年四月十四日付の書状にみえる端裏の「安田御莊住人等為末善成常名二段・為末名一反」という文言、書状中の「モシ納進候御仏聖米ヲ納メテ返抄ナシトマウスハ」云々という記載、そして書状末尾の「宗ヲカ為末は為末名の「領主」であつたと充分解釈し得る。

言い換えると、さきの免田田堵解をみるかぎり、莊園内の複数の領主は〈名〉を基盤にした所謂〈名領主層〉であり、寺領莊園にかぎるならば、名領主層の多くは寺僧であつたといえよう。

また、視点を〈名〉と「領主」とのかかわりに移すならば、莊園成立の基盤（原型というべきか）に〈名〉立券とその所有主体を「領主」と捉えることができるであらう。なぜなら、周知されている天慶三（九四〇）年三月二十三日付の「美作真生等治田売券案」にみえる「仍為蔭孫正六位上源朝臣敏名立券所進如件」という文言と、同年

月日付の「筑前国穂浪郡司解案」に示されている「勘定町段四至等、立券敏名既畢」という記載から、治田Ⅱ私領をもとに源敏が〈名〉立券したことで、各々本主手にあつた田地などを買得して〈名〉を立券したことが窺え、いづれも〈敏名〉としたのである。

言い換えると、一〇世紀中頃には、治田や買得田地などを基盤に〈名〉が成り立っていたのであり、治田・買得田Ⅱ私領↓名立券Ⅱ名領主という構図が考えられるようである。

このような事象は、康保元（九六四）年九月二十三日付の「伊賀国名張郡司解案」にみえる「件牧地等、元故転経院延珍僧都所領也、而今於伝領宅既畢、（中略）、勝四至、立券宅名」という記述と、同年十一月二十三日付の「伊賀国夏見郷薦生村刀祢解案」の「早立券宅名」という文言から窺える。さらに、一〇世紀中頃にはすでに展開されていたことは、故延珍僧都の所領（牧地・新開治田など）をもとに名立券したことからわかる。そして、その史料から〈名領主〉の存在が想定し得るのである。⁽⁴³⁾

さらに、〈名領主〉は、さきの史料によるかぎり、開発（新開も含めて）とかかわることもわかる。

一方、出作田畠とかかわる〈領主〉が、一一世紀後半（とくに一〇八〇年代）以降に現われはじめ、一二世紀中頃までみられる。すなわち、寛治元（一一〇八七）年十二月十四日付の「東大寺政所下文」の「可早令隨領主所堪、出作田畠宛田率式町夫馬老足京上事」という記載⁽⁴⁴⁾、仁平二（一一五二）年の「伊賀国黒田荘出作領主相伝次第」の「出作人領主相伝次第」という文言⁽⁴⁵⁾、そして応保二（一一六二）年二月 日付の「東大寺進上文書目録」にみる「一卷 出作領主馬允請文長久四年」という記述から、黒田柚と黒田荘に限定された「出作領主」であることが窺える。

この「出作領主」用語とともに、黒田荘出作にかかわる「領主」用語は、元永二（一一一九）年八月三日付と十二月五日付の「東大寺政所下文案」から、⁽⁴⁷⁾「私領主」用語と同じであり、いわゆる〈加地子領主〉であつたことが

わかる。

ただ、「出作領主」用語と「私領主」・「領主」用語の示す実態が同一のものか、否かは、現段階では明確にしがたい。

したがって、「領主」用語に内在する存在形態は、本領主（＝根本領主・開発領主）と、私領主（＝名領主・荘（内）領主）とを基軸にするものがあると考えるべきであろう。そして、現段階では、二つの〈領主〉の系統がいかなる系譜によるものか（単に莊園＝私領と公領に分けて考えられるべきでないことは言うまでもない）は現段階では明らかにし得ないが、〈領主制〉論が展開される際には、この二系統の「領主」用語に内在する実態を見逃して論究するわけにはいかないであろう。

では、この「領主」用語に示された〈領主〉の存在形態とともに、一一世紀末以降に史料上に現われる「権門」あるいは「権門勢家神社仏寺」などの用語は、〈領主制〉論と併行して提示されている〈権門体制〉論を展開する基礎であるが、莊園制社会における、「権門勢家神社仏寺」と「領主」とのかかわりを、次に若干垣間見ることにしよう。

注

- (1) 『平安遺文』第一巻、第一八四号文書（以下同様にて、平安遺文一一一八四と略す）
- (2) 平安遺文二一四三六
- (3) (4) 平安遺文三一九五四
- (5) 西谷地晴美「中世成立期における『加地子』の性格」（『日本史研究』二七五所収）で加地子について論究されている。
- (6) 平安遺文四一一二〇七
- (7) 平安遺文四一一七二九
- (8) 平安遺文七一三三二一
- (9) 平安遺文八一三八五八
- (10) 平安遺文八一四一六六
- (11) 『鎌倉遺文』第二巻、第八三四号文書（以下同様にて、鎌倉遺文二一八三四と略す）
- (12) 鎌倉遺文三一三八九

- (13) 平安遺文一―一八九
(14) 平安遺文四―一二五八
(15) 平安遺文四―一四九八
(16) 平安遺文四―一四九八
(17) 平安遺文五―二〇八一―二〇九二(主に五―二〇八八)
- 八
- (18) 平安遺文五―二三九八
(19) 平安遺文八―四二〇八
(20) 鎌倉遺文三―一四一〇
(21) 平安遺文四―一七二九
(22) 平安遺文五―二三九八
(23) 平安遺文八―三八五八
(24) 平安遺文六―二八一三
(25) 鎌倉遺文二―一五七三二
(26) 鎌倉遺文二―一六〇九五
(27) 鎌倉遺文二―一六七八〇
(28) 鎌倉遺文二―一五三一九
(29) 鎌倉遺文二―一四九四四
(30) 鎌倉遺文二―一五七〇〇
(31) 鎌倉遺文二―一五七〇一
- (32) 鎌倉遺文二―一九四二二
(33) 鎌倉遺文一―一九三六〇
(34) 鎌倉遺文一―一九三六〇
(35) 平安遺文七―三一七
(36) 平安遺文七―三一九〇
(37) 平安遺文七―三一九九―三二〇六とくに、安田莊の仏聖米の正返抄に「領主弓削太郎丸」と署名略押をおこなっている(同文書の七―三二〇一)。
- (38) 平安遺文七―三一九九―三二〇六(その内、七―三二〇二)
- (39) 平安遺文一―二四七関連史料に「源敏施入状案」(一二四九)がある。
- (40) 平安遺文一―二四八
(41) 平安遺文一―二七八
(42) 平安遺文一―二八二
(43) 平安遺文一―二七六
(44) 平安遺文四―一二六一
(45) 平安遺文六―二七七五
(46) 平安遺文七―三一八一
(47) 平安遺文五―一九〇〇、五一―一九〇四

第三章 「領主」「権門勢家神社仏寺」用語からみた〈権門体制〉論の課題

一〇世紀以降に現われる「領主」用語から、〈領主制〉を前提にした「領主」の存在形態を窺ってきた。そして、

「領主」用語が史料上でさまざまな実態―存在形態―を示すことと、〈領主制〉を論及するにあたつて念頭におくべき「領主」用語には、「本領主」用語と「私領主」用語であることを提示してきたが、併せて「権門勢家」あるいは「神社仏寺権門勢家」用語についても検討すべきであろう。とりわけ、一一世紀末期に「神社仏寺権門勢家」云々という用語がいかなる事由によつて現われてきたのか、という基本的課題―院政にともなう事象と考へてはいるが―はあるが、その課題を解決すべき前提に「権門」・「権門勢家」あるいは「権門勢家神社仏寺」・「神社仏寺権門勢家」用語に内在する実態を探るべきかもしれない。

さらに、「領主」用語と「権門」・「権門勢家」・「権門勢家神社仏寺」・「神社仏寺権門勢家」とのかかわりも考へていく必要もあろう。

そこで、「領主」用語を留意しながら、「権門」・「権門勢家」・「権門勢家神社仏寺」・「神社仏寺権門勢家」用語に内在する実態―存在形態―について検討していくが、まず〈権門体制〉論を展開された黒田俊雄氏の論及から窺つていくことにしよう。

〈権門体制〉論は、黒田俊雄氏によつて提示された所謂歴史理論であり、対〈領主制〉論の新しい視点の歴史観であるといえよう。すなわち、黒田氏は〈権門体制〉について、

権門勢家という言葉、葉はずでに九世紀からみられるもので、政治的・社会的に権勢ある門地・家系をいう話である。その後、それが莊園の發達と攝關政治の展開とに相即して現われてきたことからわかるように、（中略）
実体は制度としてでなく事実として存在したのであった。（中略）、私的にときには非合法に現われる点が一つの特色であるが、しかし攝關政治期まではその最盛期においてもなお私的な側面が支配的になることがなかった（中略）。しかるに一一世紀後半にいたり、（中略）、権門勢家はその私的な支配の性格を明瞭にしはじめ、国家公権に対して独自のその存在を主張するように、質的に転化するにいたつたとみられる。

という「権門勢家」の質的變化を言及しながら、「このように権門勢家の支配を基礎としそのために存在する国家体制を『権門体制』と名付けたい」と述べ、さらに「この体制は日本における最初の封建国家の形態であると考え^①る」と言及されている。

若干長文に亘ったが、黒田氏の〈権門体制〉論への指向と展開が窺えるとともに、この論究を次のように整理し得る。すなわち、

- ① 莊園と攝關政治の展開とともに現われる。
 - ② 事実（存在）として私的にあるいは非合的に現われる。
 - ③ 一一世紀後半には私的支配を明瞭にし、对国家公権に独自の存在を主張する。
 - ④ 権門勢家支配を基にした国家体制が存在する（＝権門体制）、
 - ⑤ 所謂〈権門体制〉は、最初の封建国家形態である。
- と論旨を整理することができる。

そこで、①から⑤までの論旨、とりわけ②③の言及に留意しながら、「領主」用語とのかかわりで、「権門」・「権門勢家」・「権門勢家神社仏寺」・「神社仏寺権門勢家」用語（以下、「権門勢家神社仏寺」で便宜上統一して言及する）に内在する存在形態について窺っていくことにしよう。

寛治六（一〇九二）年七月十日付の「東大寺牒」に「而今住人等為逃庁役、或号権門之散所」という文言がみえ、「権門」の散所であることが一種の権威に繋つていくことを示している。院政期になってまもない時期のことである。そして、院政期直前に「本領主」用語が現われ、院政期の形成以降には「在京領主」、「私領主」、「出作（人）領主」、「根本領主」、そして「名領主」の用語がすべて出揃うことになる。また、院政期の一一六〇年代後半には、「本領主」用語が数多く史料上に現われる。

このことはともかく、一〇八〇年代後半以後に現われる「権門勢家神社仏寺」用語に内在する存在形態を窺っていくことにする。

さきに触れたように権門勢家の權威に擁護されることが自らを守る要件と考えられていたようである。この権門勢家の《權威》は、伊勢太神宮役夫工作料の徴納においてもみられる。すなわち、時期が少し下るが、長承三（一一三四）年正月二十日付の「官宣旨案」の「応除神社仏寺領官省符莊外、令官使本宮使相共、就莊莊領家、催濟造伊勢豊受太神宮役夫工作料米等事」で、

諸国合^③應之課役也、是以不論権門勢家之莊、不謂神社仏寺之領、国内一同所徴下也、須任配符令進濟之處、各募其威、合期難濟、

とあり、権門勢家や神社仏寺の莊園・所領を問わず、造伊勢太神宮役夫工作料米などの賦課役の回避が「其威（権門勢家および神社仏寺の權威）」を募ることによっておこなわれているのである。同様な事象は、長承三年の七年前にもみえる。大治元（一一二七）年十一月十九日付の「東大寺三綱申文」によると、興福寺木守六人および類伴など一〇余家が、「長者宣」とにわか称して、東大寺の寺家の所勘に随わずに、「彼權威」を募つて、東大寺領居住にともなう地利弁進と所役勤仕をおこなわなかったことが述べられている。この事態とともに、この申文には、「不輸之地不可有私領主之由、度度所被下 宣旨也」という文言と、「於不背本家者、任不妨伝領、至于对捍之時、更不用相承、是神社仏寺権門勢家莊園田地之常事也」という記述があり、不輸地に私領主の存在は容認されていないことと、本家に違背しない場合には伝領が認知されていたことが窺える。この事象は社寺や権門勢家の莊園での常事であつたという^④。これらの記載から、「其威」とは「権門勢家神社仏寺」（とくに神社仏寺）の權威であり、周知されているように彼らは「本家」でもあつた。

そして、諸社寺領に関して、「領主」（この場合「莊園内領主」を含む）の任意によってその進止がおこなわれず、

本所つまり諸社寺によつて進止がなされたことを、承安元（一一七一）年十二月十二日付の「官宣旨」によつて窺うことができる。すなわち、

謹檢案内、諸寺諸社之領者、各為本所之進止、不能領主之任意

という文言がそれである。^⑥さらに、安元元（一一七五）年十二月四日付の「右近中将光能書状」にみる「俊方事、同重可仰国司候、但為権門者、不能国司召之由」という記載によつて、権門（勢家）^⑦に関しては、国司が（召されて）関与すべきでないと言はれてゐる。

このように社寺や権門勢家の莊園などに対しては「領主之任意」によつて進止すべきでなく、本家＝本所に違背しなければ、（領主に対して）伝領や相承に関して認知するという情況が窺えるのである。また、社寺や権門勢家の莊園においては通常のことであつたことが提示されてゐるのである。

言い換えると、すでに触れたように興福寺領莊園の内に存在してゐた僧侶層による「領主」などは、「権門勢家神社仏寺」用語で示される本家・本所の支配のもとで、所領の伝領（相伝も含め）や相承が容認されてゐたと考えられ、すでに周知の本家・本所（「権門勢家神社仏寺」用語で示されてゐる社会層）↓領主↓（作人？）という上下關係が存在してゐたといえよう。

だが、「権門勢家神社仏寺」用語とともに記載されている「領主」用語に、さきに述べた「本領主」（＝根本領主＝開發領主）、「出作領主」、「名領主」などが包含されてゐるか、否かは明確ではない。

ただ、「本領主」に関しては、一二世紀末以降、「職」付帯・表示と併せて「権門勢家神社仏寺」用語およびその実態とともに検討すべきかもしれない。また、ここではとんど論及しなかったが、在家・寄人・田堵とのかかわりで「権門勢家神社仏寺」用語とその存在形態・実態を究明することも必要であらう。^⑧

なぜなら、時期が下るが、正元二（一二六〇）年四月六日付の「攝津守中原師藤解」に「請任先例、被宛行在家

役、神社仏寺権門勢家莊園寄人等、居住要津、不勤国役事」という記載から、「権門勢家神社仏寺」の權威を募ることによって、国役勤仕に拒否がおこなわれていたことも窺える。そして、同解には「而中古以来、神社仏寺領、権門勢家莊、逐年蜂起、每任陪增^倍」という文言があり、莊園所領の寄進行為として理解する以上に、「領主」は言うに及ばず、「在家」、「寄人」、「田堵」とのかかわりを究明していくべきではなからうか。

したがって、所謂「権門体制」が私的かつ非合法的に現われ、私的支配と独自の存在を主張していく基盤には、「領主」用語で一括されてきた多岐にわたる「領主」の存在とともに、在家・寄人・田堵の「権門勢家神社仏寺」用語で示される所謂「権門社寺」への関与―逆の立場からすれば支配―があつたからにほかならない。ゆえに、この基盤形成にかかわる諸層を支配する展開過程の究明によって、より一層「権門体制」が明瞭になるものと考えている。

注

- (1) 黒田俊雄『体系日本歴史2 莊園制社会』（とくに、『院政と平氏政権』）
- (2) 『平安遺文』第四卷、第一三〇九号文書（以下同様に、平安遺文四―一三〇九と略す）
- (3) 平安遺文六―二二九七
- (4) (5) 平安遺文六―二〇九六
- (6) 平安遺文七―三五八三
- (7) 平安遺文七―三七二八・三七二九
- (8) 黒田、前掲書（とくに、「莊園制社会の成立」において、田堵、名主、そして「職」について論究されている。ただ、在家に関する視点は見出し得ないようである）
- (9) 『鎌倉遺文』第十一卷、第八四九六文書、

結びにかえて―「領主」用語からみた〈領主制〉の一元的視点によせて

古代・中世、とくに一〇世紀以降の荘園史料に現われる「領主」用語は、単に〈領主〉と限定して〈領主制〉論を展開し得るものでないことを提示している。

「領主」用語に内在する実態かつ存在形態は単一的ではなく、「私領主」、「在京領主」、「本領主」、「根本領主」、「開発領主」、「荘園（内）領主」、「出作領主」、そして「名領主」という用語が現われ、どの「領主」用語が同一体として繋がっていくかを提示してきた（「地頭領主」や「御家人領主」についてはほとんど言及していないが）。そして、「領主」用語で、その主たるものが「本領主」と「私領主」であることを指摘し、「本領主」は「根本領主」や「開発領主」と結びつく存在であることも明示し、ほとんどの「領主」用語は一二世紀末以後に現われることも提示してきた。

言い換えると、「本領主」と「私領主」の用語から、その上下関係についても検討を加えて、〈領主制〉論を展開していく前提に、多岐にわたる「領主」用語の分析と整理をおこなう必然性を提起しておきたい。

さらに、「領主」用語とのかかわりの中で、「権門勢家神社仏寺」用語が示す所謂〈権門体制〉論が展開されるべきである。併せて〈田堵〉、〈名主〉、〈在家〉とのかかわりをもちながら、〈権門体制〉論が究明されることも言及してきた。

したがって、〈領主制〉論を展開していく前提に据えるべき基礎には、一〇世紀以後に現われ、時期とともに単一的視点では考えるべきではない「領主」用語に内在する複数の〈領主〉の実態かつ存在形態の把握と分析がなければならぬと考えている。ここでは、「領主」用語が明示する単一でない「領主」を捉えてこそ、より一層正確な〈領主制〉論が展開し得ることを提示して結びにかえたい。

古代・中世の「領主」用語使用の実態一覧

年 号		領主用語対象所領種目					「開発」の記載		文 書 名	主要(「領主」用語)記載箇所	文 書 種 別						出 典 史 料 名 (巻・号)
											宣旨	売券	目録	申文	議状	解文	
和年号	西暦	領主(側)	田	畠	荒田	荒畠	有	無			下文	処分状	相伝	注進状	宛行状	他	
延喜4年	904	●	●					●	唐招提寺使解案	謹上領主諸院						● (案)解	平1-189
康保3年	966	●	● 治田他				○? 新開田		伊賀国夏見郷刀祢等解案	御牧是有領主、又牧内治田新開田、……						● (案)解	平1-287
万寿2年	1025	●	● 相伝私人領					●	威儀師仁満解案	勘徴地子之間日、故中満法師為其時領主、……						● (案)解	平2-499
応徳元年	1084	◎ 本領主		●				●	伊勢国掃守某畠地売券写	右件畠地、従本領主僧勢増之手、……		● 売					平4-1207
寛治元年	1087	●	● 出作	● 出作				●	東大寺政所下文	可早令隨領主所(勘)堪、出作田畠宛田率、……	● 下						平4-1258
寛治2年	1088	● 在京領主	● 佃					●	東大寺領伊賀国名張郡定使懸光国解案	至子他在京領主者、皆所令徴取加地子也、						● (案)解	平4-1261
永長2年	1097	◎ 私領主 (管倉符田)	●					●	興福寺政所下文	已經數百歳者、全以所不有私領主也、……	● 下						平4-1385
天永元年	1110	◎ 本領主			● 荒所			●	沙弥心覚處分状案	抑件財物雖有所々、本領主入道当郷之人也、者、……		● 越					平4-1729
元永2年	1119	◎ 私領主	(出作田?)					●	東大寺政所下文案	可令早隨私領主僧蓮覺所勘、弁濟加地子事	● 下(案)						平5-1904 (権門)
大治5年	1152	● 出作田? 出作人領主	(出作田?)	出作畠?				●	伊賀国黒田荘出作領主相伝次第	出作人領主相伝次第			● 相				平6-2775
永暦元年	1160	● 名一領主	○ (名田?)					●	攝津国垂水牧寄人申文案	所謂西時枝・中時枝也、爰西時枝領主定季法師、……				● 申(案)			平7-3117
応保元年	1161	● 出作領主	○ (出作田?)					●	東大寺進上文書目録	一卷 出作領主馬允請文 長久四年			● 目				平7-3181

年 号		領主用語対象所領種目					「開発」の記載		文 書 名	主要(「領主」用語)記載箇所	文 書 種 別						出 典 史料名 (巻・号)
和年号	西暦	領主(御職)	田	畠	荒田	荒畠	有	無			宣旨 下文	売券 処分状	目録 相伝	申文 注進状	議状 宛行状	解文 他	
長寛2年	1164	◎ 根本領主 本領主	?	?				●	中原親貞解	件預所職相伝由來者、根本領主 沙弥寿妙也、以本領主高方之子 と孫々、永可為重代伝領、……					● 解	平7-3322	
長寛3年	1165	◎ 本領主	(私領) ??					●	阿闍梨聖顯寄進状案	右件私領元者、本領主平季盛 伝領之間、					○ 寄進状	平7-3352	
永万元年	1165	◎ 本領主	(御厨)					●	占部安光文書紛失状 案	右、当御厨者、本領主葛西三良散 位平朝臣清重先祖以來、……					○ 紛失状	平7-3355	
嘉応元年	1169	◎ 本領主	●	●				●	伊賀国黒田荘官等解	然而本領主重時・重貞・重末 伝領主彼末友、……					● 解	平7-3511	
嘉応2年	1170	◎ 本領主	○ 荘田?					●	興福寺西金堂満衆等 解案	因茲高殿荘本領主参仏前之昔、 ……					● (案)解	平7-3547	
承安5年	1175	● 領主職						●	鴨御祖社称宜鴨祐季 申状	抑至領主職者、祐季子子孫孫 可知行者、……			● 申			平7-3671	
安元元年	1175	● 根本領主	● 例名					●	伯耆局讓状案	(端書)根本領主伯耆局讓右馬 権頭隆信状案」					● 讓	平7-3731	
治承2年	1178	◎ 本領主	●	●				●	藤崎宮々掌木行近田 畠売券案	本領主散位木行近在判		● 売				平8-3858	
元暦元年	1184	◎ 本領主	—	—	—	—	—	—	後白河院庁下文案	其状傳、温泉御荘本領主平季 広解申進超請事、……	● (案)下					平8-4166	
文治3年	1187	● (領主・權門?)	—	—	—	—	—	—	関東御教書	縦領主雖為權門於荘公下(司 イ)職等国在庁者、……	● 御教書					鎌1-264	
建久7年	1196	◎ 本領主			●		○		肥前河上宮請衆等解 案	早任本領主之旨、令領作、可致 經会之丁寧之状如件、					● (案)下	鎌2-834	
建久9年	1198	● 領主職	●	●					後鳥羽院庁下文	以相久・同母因幡等、可令知行件 兩荘領主職并私田畠等之状、……	● 下					鎌2-1020	

建仁 3 年	1203	◎ 本領主	●					●	僧長允田地売券	残所田畠者、本領主長允之許 留置処也、……				● 申		鎌3-1389
承久 4 年	1222	◎ (領主職) 本領主		(荘園?)				●	大江泰兼愁状	以泰兼子々孫々為本領主、可 令相伝領管之旨、				○ 愁状		鎌5-2937
承久 4 年	1222	◎ 本領主		(荘園?)				●	太政官牒	応任先宣旨・国司庁宣・延暦 寺牒・本領主寄文等、……	○ 牒					鎌5-2940
承久 4 年	1222	◎ 本領主		(荘園?)				●	太政官牒	応任先宣旨・国司庁宣・延暦 寺牒・本領主寄文等、……	○ 牒					鎌5-2941
貞応 2 年	1223	◎ 本領主	●					●	六波羅下知状案	本領主基貞・基秀等契約次第、 ……	○ 下知(案)					鎌5-3140
嘉祿 3 年	1227	● (領主職)	●					●	成賢寄進状	面有子細、領主職沙汰取之、… …				○ (案)寄進状		鎌6-3680
寛喜元年	1229	◎ 本領主		(保?)				●	後堀河天皇宣旨	件保者、本領主友兼寄附于日 吉社二宮二季講用途、……	● 宣					鎌6-3861
嘉禎元年	1235	● (下司職) 開発領主	—	—	—	—	●		海老名盛重讓状案	右、下司職者、為開発領主相伝、 ……				● (案)讓		鎌7-4852
嘉禎 2 年	1236	● 惣領主	●					●	良隆宛文案	但背惣領主使命候八人日、自 業自得果欵				● 宛文案		鎌7-4914
嘉禎 4 年	1238	◎ 本領主	●					●	東大寺糞料田注進状	然本領主引拔、□官役付残荘 田、……				● 注		鎌7-5226
延応元年	1239	◎ (地頭職) 本領主	—	—	—	—		●	関東下知状	代々將軍・二位殿御成敗事、 本領主与当給人事也、……	○ 下知					鎌8-5496
延応 2 年	1240	◎ 本領主	●	名田				●	沙弥寂念申状写	件名田者、自本領主弘宗之手、 有由緒、				● 申(写)		鎌8-5550
仁治 2 年	1241	● (名主職) 開発領主	—	—	—	—	●		官宣旨案	件兩名主職者、為譜代相伝開 発領主、……	● 官					鎌8-5808
建長元年	1249	◎ 本領主	●					●	僧貞弁領知所々注進 状	石木里廿六一老丁 卅四一一 丁本領主小城小次郎宇佐宮入田 免二丁本領主門小二郎				● 注		鎌10-7114

年 号		領主用語対象所領種目					「開発」の記載		文 書 名	主要(「領主」用語)記載箇所	文 書 種 別						出典史料名 (巻・号)
和年号	西暦	領主(側)	田	畠	荒田	荒畠	有	無			宣旨 下文	売券 処分状	目録 相伝	申文 注進状	議状 宛行状	解文 他	
建長3年	1251	◎ 本領主	○ 地					●	沙弥西念屋地売券	然而忠村并西念為本領主之上者、……		● 売				鎌10-7336	
建長3年	1251	◎ 本領主	●					●	出雲国司庁宣	彼本領主令致懈怠云々、依之、令改易本領主、……	○ 庁宣					鎌10-7348	
正嘉2年	1258	◎ (新地頭) 本領主	—	—	—	—		●	肥前彼杵莊惣地頭代後家尼某請文	然者、新地頭左衛門尉追本領主之時例、可被致其沙汰之处、……					○ 請文	鎌11-8335	
正元元年	1259	● 開発領主	●					●	肥後鹿子木莊相伝次第	一 当寺相承者、開発領主沙弥寿妙嫡々相伝之次第也、		● 相				鎌11-8423	
弘長3年	1263	◎ 本領主	●	●				●	太政官符	当莊者、去天平宝字元年、本領主草賀種吉、為聖朝安穩滅罪生善、……	○ 官符					鎌12-8942	
文永2年	1265	● (御家人)	●					●	若狭国惣田数帳写	『領主御家人青友衛門尉跡、同源次伝領也』					○ 惣田数帳	鎌13-9422	
文永7年	1270	◎ 本領主	(保)						後嵯峨上皇院宣案	但馬国蓮台寺・吉祥寺并石和田保等、任本領主両度寄進状、……	○ 院宣(案)					鎌14-10581	
文永8年	1271	◎ 本領主	●					●	実能田地寄進状	於作人職、為本領主実能之進止、……				○ 寄進状		鎌14-10940	
文永9年	1272	◎ 本領主	●	●				●	篁劔聖教等讓状案	但本領主尼覚恵忌日、……毎年可有沙汰也、……				● 讓(案)		鎌14-10961	
文永10年	1273	● (領主職) 根本領主						●	若狭太良莊相伝由緒案	一□□与領主職各別事、……彼○根本領主仏院之故、……					○ 由緒(案)	鎌15-11440	
建治2年	1276	◎ (領主職) 本領主	—	—	—	—	●		浄成申状	本領主陰陽頭家米□為先祖開発之地、……			● 申			鎌16-12329	
建治3年	1277	◎ 本領主	(下地)					●	関東下知状案	……本領主子孫可令領知坎、雖為新補地頭、進止下地之条、不可有異儀、……	○ (領主職) 下地					鎌17-12854	

建治3年	1277	◎ (領主職) 本領主	(保)				●	小槻有家申状案	文治四年ニ本領主貞宗か寄文を得て、多年知行、……			● 申(案)		鎌17-12960
弘安3年	1280	◎ 本領主	(荘)				●	祐実陳状案	一通 本領主助盛寄進状案 貞永元年四月日ノ一通 同領主讓宗春状 同年月				○ 陳状(案)	鎌19-14196
弘安6年	1283	◎ (領主職) 本領主	— — — —				●	大和春日社政所下文	且任 長者宣・国宣并本領主記録等旨、雖替青女領主職、於年貢以下濟物者、……	● 下				鎌20-14944
弘安7年	1284	◎ 本領主	(所領)				●	関東評定事書	有限公事者、相加本領主跡、可被致其沙汰、……				○ 評定事書	鎌20-15201
弘安7年	1284	◎ (領主職) 本領主	(荘)				●	源頼基申状	(河内カ)□国高木荘本領主源頼基謹申、……同国古市郡□高木荘本領主職者、……			● 申		鎌20-15319
弘安8年	1285	● 開発領主	— — — —				●	遠江浜名神戸司大江助長申状	右、子細者、助長依為開発領主之正流、……			● 申		鎌20-15702
弘安8年	1285	◎ 本領主	— — — —				●	後宇多天皇宣旨	……不調向背事者、可為本領主之進止、……	● 宣				鎌21-15732
弘安9年	1286	◎ 本領主	— — — —				●	文殿注進状案	建保本領主讓生仏之由、……			● 注(案)		鎌21-16028
弘安9年	1286	◎ 本領主	(御厨)				●	関東評定書	而宇佐領既被返本領主之上者、御厨領主等可有相遠坎、……				○ 評定事書	鎌21-16095
弘安10年	1287	◎ 本領主	(御厨)				●	豊受大神主申状	本領主頼兼捧神宮解状、經奏聞、……			● 申		鎌21-16280
正応元年	1288	◎ 本領主	— — — —				●	円性陳状	件三名山林等者、本領主右長者自中大夫判官宣季次第相伝、……				○ 陳状	鎌22-16635
正応元年	1288	◎ 本領主	(荘領)				●	大和井上荘領主等陳状	件荘領者、本世六町也、而本領主長縁 ^(補) 太補公知行之時、				○ 陳状	鎌22-16707
正応元年	1288	◎ 本領主	— — — —				●	某厨相伝系図	……、凡本領主惠真阿闍梨以 ^(奉々) 仁安二年□寄進大神宮、……				○ 系図	鎌22-16780

年 号		領主用語対象所領種目					「開発」の記載		文 書 名	主要(「領主」用語)記載箇所	文 書 種 別						出 典 史 料 名 (巻・号)
和年号	西暦	領主(領主)	田	畠	荒田	荒畠	有	無			宣言 下文	売券 処分状	目録 相伝	申文 注進状	議状 宛行状	解文 他	
正応3年	1290	◎ 本領主	●	●				●	攝津国菅野西荘領家 下知状案	(寛真阿闍梨遺状明力) 所詮、本領主 [] 鏡之上者、……	○ (領下知状)						鎌23-17468
正応3年	1290	◎ 本領主	(荘)					●	記録所注進状案	右、件論所等、実明卿為本領主、 ……				● 注(案)			鎌23-17962
永仁3年	1295	◎ (開闢領主) 本領主					●		関東下知状案	□村者、為開闢領主、……不帶還 補状上者、何可号本領主哉、……	○ (領下知状)						鎌25-18899
永仁6年	1298	● 惣領主類						●	伏見上皇院宣	……尾張国落合郷惣領主職事、 ……	● 院宣						鎌26-19780
正安元年	1299	◎ (領主職) 本領主						●	尊正契約状	右、当荘者、本領主聖俊令寄進 当御社以来、……						○ 契約状	鎌26-20175

注記：1) 「本領主」用語を中心にまとめたが、一部「領主」「私領主」「在京領主」等々の用語も入れ込んでいる。それ以外の「領主」用語の大半は割愛した。

2) 「本領主」用語の記載箇所のみを便宜上明示した。文書種別では同類のものは○文書名として、同文書は●で種別を明示した。

3) 出典史料名は、『平安遺文』を「平」とし、『鎌倉遺文』を「鎌」とし、その後に文書番号を記した。